

～ JIS(XRD)法の ISO 落選とその影響～

アスベストに対して、その規制の穴であったアスベスト分析法（定性）が ISO で満場一致で、偏光顕微鏡等を用いる欧米法（ISO 法、EPA 法）が決定された。日本の JIS(XRD)法は落選した。

建材メーカーの N 社を中心として推し進められた精度 1%前後の JIS(XRD 法)は、今後 ISO に認められなくなる。JIS 法における偏光顕微鏡法で消光角が全て間違っていた問題も、ISO 法、EPA 法における消光角が採用される事となる。（消光角 0°、又は平行）

偏光顕微鏡の消光角については、2007 年にアスベスト分析の JIS 改正（改悪）時に、EPA や多数の日本の分析技術者より、消光角の訂正を求める抗議やパブリックコメントが多数寄せられていたにも関わらず、強引な擁護を行った N 社や『アスベスト建材の最新動向と測定法 財団法人建材試験センター編』の編集委員長であった名古屋俊士氏の罪は重い。又、編集委員執筆の神山宣彦（東洋大学）、小西淑人（社団法人日本作業環境測定協会）、富田雅行（ニチアス株式会社）、山崎淳司（早稲田大学）も同罪であり、事務局の井出辰一郎（財団法人建材試験センター）、片山正（財団法人建材試験センター）等は何のために、JIS を貶め、多数の将来の被害者を出すことに手を貸したのか、不可解である。

しかしその様な状態の中において、小坂浩氏（元兵庫県立健康環境科学センター）、宇野泰章先生（名古屋工業大学名誉教授）は JIS(XRD)法を全面否認した。

また、小沢絢子氏（元株式会社 アースアプレイザル。現 EFA ラボラトリーズ）は、米国のバーミキュライトによる大アスベスト被害を受けて EPA が確立した『ウィンチャイト』『リヒテライト』を含めたアスベスト 8 種類を検出する EPA 法を日本で実践された。

外山尚紀氏（東京労働安全衛生センター）は、JIS（XRD）法でノンアスベストと判定された材料を ISO 法で細密検査し、4 例中 4 例に基準値（0.1 重量%）の何倍ものアスベストが含有され、4 例中の 3 例がバーミキュライト中に含有されたウィンチャイト、リヒテライトである事を特定、実証した。

逆境の中での 4 氏の活躍は非常に大きいと考える。

又、アスベストにおける情報が手に入りにくい中、経産省と交渉し、ISO 議事録を入手し、毎日新聞の一面に署名記事を載せた大島秀利氏の勇気には感心する。スクープ報道（新聞協会賞受賞）も大島氏の勇気の賜物と考えられる。同氏はまた、「アスベスト 広がる被害（岩波新書）」も著している。

今後、シップリサイクル条約や REACH 規制におけるアスベスト分析は、ISO 法、EPA 法が用いられるため、日本の JIS(XRD)法による検査の「アスベスト含有せず」は通用しなくなる。

簡便で 200～400 万円程度の偏光顕微鏡（オリンパス・ニコン等）は海外での分析で用いられており、電顕法に使用する電子顕微鏡も日立製等、メイドインジャパンである。建材においては、日本で製造された分析機器が海外で使用されて ISO に反映されているにも関わらず、N 社を中心とする誤った消光角により、高精度を誇る日本の分析技術を貶め、日本の技術の発展を妨げる事は、まったく納得できない事である。

科学技術の発展の基礎は、数学と物理学であると言われていますが、工業技術の発展の基礎はそれらを基にした分析機器と規格になりつつあります。今後、日本の技術はその優駿な分析機器と分析方法により、一時的な混乱はあっても、アスベスト被害を防ぎ、建材、ガスケット、ブレーキ材等の分野のみならず、高温材料、印刷、ペンキ、紙等、あらゆる分野での競争力を身につけ、より優秀な代替品を開発し、将来の技術先進国となる事を信じています。

関係者の猛省を促すとともに、ゼロアスガスケットを確実に製造するよう、これからもがんばっていきたいと考えています。

平成 24 年 9 月 26 日
旭プレス工業株式会社
代表取締役社長 久野 博